

『砂漠の国の柔道場』 『第五話』 柔道が築いたアラブとの信頼 (下)

岡本文夫 (元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書)



『岡本亭』の盛況ぶり。その夜は、上司の送別会を開催

日本でも、社会の安寧を保つためには、警視庁の公安部や法務省の公安調査庁が秘密裏に機能している。サウディアラビアでは、内務省の下部機構として、一般警察、交通警察、宗教警察(ムタワ)、秘密警察のCID (Central Investigation Department)、思想犯専門のGIAが機能している。前二者は制服を着用しているから直ぐ解るのだが、後三者は私服を着て存在を隠している。宗教警察の場合は、礼拝時刻になってもまだシャッターを下ろさず営業をしている店があると、木の鞭でウインドウをガンガン叩いて怒鳴っているから、「ああ、あれが宗教警察か」と確認出来る。悪いことはしていないと自認していても、存在が気になるのが後二者の監視組織である。

カフジの日本人全員は、電話盗聴の被害者意識を持っていた。日本へ残してきた妻や家族との国際電話の最中に、突然通話音声のレベルがグンと下がり、バックに雑音が混じりだす。技術的なことは解らないが、盗聴作業による回線ブランチが原因であるに違いない。従って、筆者の妻との国際電話には、ある暗号を決めていた。音声レベルが下がったと感じたら、「ああ、昨日さあ。山田が部屋に遊びにきてさあ」。そこで妻は、新聞やテレビで湾岸情勢をこのように報道していたなどという話は一切しないことにしていた。

不愉快と思いつつも、触らぬ神に祟りなし。この問題にタッチする日本人はいないのだが、筆者の場合は下記のエピソードの積み重ねから、盗聴行為の存在を確認した唯一の日本人だったと考えている。ここでも、柔道指導を通じてアラブ社会との間で築いた信頼関係に救われていた筈だ。

筆者の単身赴任者寮の自室は、通称『岡本亭』と呼ばれており、親しい仲間の溜まり場となっていた。漁労長である証拠に、部屋には大型小型二台の冷凍庫を供える単身者寮唯一の部屋だった。食客が多い分だけ、単身者には珍しく食料の買い出しが多かった。昼寝（シエスタ）の社会習慣によって、午後は4時から全商店が再開する、筆者は、気分転換の意味も含めて、しばしば仕事をちょっとだけブレイクして、一番空いているこの時間帯に買い物に出かけた。そうすると、かなりの頻度で見知らぬ東洋人に遭遇する。明らかに、その男は最も店に客がいない時間帯を選んで来店していた。そして、筆者を確認すると必ずそそくさと姿を消した。

当時、カフジには130名の日本人従業員と僅かな帯同家族がいた。また、必要に応じた日本人コントラクターも勤務していたが、付き合いの深浅はさておいても、全員が顔見知りだった。カフジの外れにある唯一の5階建てビルが、通称『電電公社ビル』と呼ばれており、通信機能の中樞を担っていた。見知らぬ東洋人は、そこを根城にして盗聴に従事する日本語を解する韓国人だと推察した。

そして、次に遭遇したエピソードから、盗聴行為が事実であることを確認した。離れ離れの家族と過ごす時間を最大化したい筆者は、子供たちの冬休み期間に家族をカフジに呼んで過ごし、これを日本へ送る形で休暇を取る作戦を組んだ。カフジに家族を安心して泊めるホテルなどないから、子供が幼くて家族帯同し社宅エリアの住人であった兄貴分の五十嵐ご一家の犠牲的協力によって、10日間も家族で居候させて頂いた。

サウジでの家族の引き取りは、亭主が空港内に出迎えて家族であることを証明をして、初めて入国させられる。家族が恋しくて仕方がない筆者は、家族が乗る中華航空の到着3時間前にイミグレーションエリアに入ろうとしたが、係官は拒否した。

「まだ3時間もあるじゃないか！そこらに座っとれ」。

30分後、ひとりの東洋人が入ってきて、係官と流暢なアラビア語で談笑して、中に入ってしまった。アラビア語の会話にはついていけない筆者だったが、ふたつのキーワードはハッキリ確認した。男は、『カフジ』と言った。そして、我が家族が乗る中華航空と同じフライト番号も言った。カフジにこんな流暢なアラビア語を喋れる日本人はいないし、空港のある東部地区にも語学達人の日本人はいない。この男は特別な語学訓練を受けているのは明白だ。これくらい流暢な日本語もマスターしているに違いない。

「おい！あいつだけ通して、なんで俺が待たされるんだ」。抗議する筆者に、係官が逆襲した。「お前、いったい何年サウジにいるんだ？」「通算5年だが、それがどうした」

「お前、5年もいて、そんなアラビア語しか話せないのか。アイツなんか、半年しかいないというのに、あんなに完璧に喋れるぞ」。

さらに、重大な確認があった。サウジには『カファラ制』という因習があり、ワークビザで入国した者は、パスポートを当局に召し上げられて、『イガマ』という居住証明の単冊を渡される。つまり、一朝有事の際の逃亡禁止制度になっているのだ。

イミグレ・エリアに入る際には、係官にイガマを預かられる規則になっているのだが、その男が提出したのは、緑色のイガマだった。カフジの鉱業所の全外国人のイガマは

焦げ茶色だ。これは、件の東洋人（韓国人）が特殊任務についており、多分外交官に準じる待遇を意味していると推察された。

待ちに待った中華航空が到着して、係官に連れられた妻が小走りに近かずにきた。感動の一瞬の後、二人の子供を受け取るのだが、筆者の頭の片隅は冷静に盗聴者の行動を観察していた。

入国したのは、50歳代とおぼしき幹部と件の男と同じ30歳代の男の二人連れだった。若い方はシフトチェンジ要員であり、幹部っぽい方は、サウジ政府の盗聴を管轄する部門への挨拶か業務連絡のための出張だったと推察された。

翌1990年7月、突然イラク軍はクウェイトに侵攻して、一日を経ずしてクウェイトを占領した。湾岸危機の始まりであり、半年後の世界を巻き込んだ湾岸戦争へと繋がる。クウェイトとの国境から僅か18km南にある鉱業所で任務に従事する我々が感じざるをえない恐怖は筆舌にも表現し難い程深いものであった。

単身赴任の従業員のところへは、日本の留守家族から会社辞めてでも帰国して欲しいと連日電話で攻められるから、精神状態を崩す従業員が続出した。

しかし、操業継続を強要するサウジ政府命令とともに、前述の『カファラ制』でパスポートすら手元にないから、退避帰国する術もない。

かかる状況下、妻に無事を伝える電話の存在が、平時にも増して重要となっていた。カフジと東京の時差は6時間。筆者がベッドに入ろうとする現地時間の午前0時は、東京では朝の6時。起こしたとしても迷惑ではない時刻だし、眠る前に妻の声くらい聴きたいではないか。

その夜、お互いの元気を確認し合う電話に、またしても「ザーザー」という雑音が被さってきた。特に機嫌が悪かった筆者は、盗聴者を怒鳴りつけた。

「ヤイ！てめえ！夫婦の会話に割り込んできやがって、それでも男か！下衆野郎！」

「あなた、何言ってるの。この電話は盗聴されてるかも知れないでしょう」

「そうそう！だから聴いてるバカヤロウに文句言ってるんだ！やい！聴いてるんだろ、この野郎が！」

警告手段として、回線はバチッと切られた。『ほーら見ろ。聴いてたじゃないか！』盗聴を不愉快に思っていたとしても、ここまでやれる日本人はいない。報復が恐ろしいからだ。盗聴者は、盗聴内容を秘密警察に報告するのが任務だからだ。

事実、盗聴者は音声録音とともに筆者に関するレポートを上げた筈だ。

「岡本なる男は、盗聴の存在を明確に認識している。しかも、本官に罵詈雑言を浴びせて侮辱した」。

数日後、日本人とサウジ人との橋渡役として世話を焼いて衆望を集めている労働省のドーサリー局長が筆者のデスクを訪ねてきて曰く。

「秘密警察のサーリム局長が腰を痛めてしまって、ミスターオカモトに施術して貰えないかと希望していますが、お願いできないでしょうか？」「ああ、良いですよ」。

尊敬してやまない滋賀大学柔道部の堀部正一師範は、単なる武道家ではなく、修行を通じた教育家でもあり、整体術の名医でもあった。堀部師範から深く薫陶を頂いていた筆者は、真似事ではあるが、道場でどこか痛めた弟子は部屋に連れて帰って治療を施してきた。それが街に伝わっているから、時々柔道とは全く関係ない筋から施術を頼まれることもあった。全く入浴しないベッドウィンの老人が事務所に担ぎ込まれた時などは、体臭に辟易したものだが、逆効果にならない範囲で治療して喜ばれたものだ。

呼ばれた理由を額面通りには理解できなかったが、一応行くことにした。

韓国人から上がった録音付きの重要報告を、秘密警察としては放置できないに違いない。しかし、いきなり事務所に乗り込んで逮捕するでもなく、秘密警察へ任意同行する訳でない、自宅での治療理由で呼びつけるところに、体制側の酌量の余地を感じる事が出来た。

それにしても、秘密警察局長の自宅を訪れる日本人など最初で最後のことだろう。

実は、ドーサリー局長もサーリム局長も長男を筆者の道場に通わせていたのだ。

局長の左右には目つきの鋭い上級職の部下が同席しており、これは人物鑑定の場であることが推察された。筆者は、構わずに整体術理論を解説してから施術に入った。硬直化した脊髄は、頸椎から腰椎に到るまで、一旦ボキッと音を立ててストレス解放して血流を賦活する。そして、肩の線と腰骨の線を反対に捩じって腰椎の柔軟性を取り戻す。荒仕上げが終わったら、掌圧と指圧で細かく施術する。

「先ず、その被り物（イガールとゴットラン）を外して頂きたい」「エエッ!？」

局長は抵抗を感じつつも、腰痛治療を理由に呼びつけているから仕方がない。筆者は15分程掛けて、丁寧に施術してあげた。間違いなく、局長の血流は賦活させて体調が良くなったことだろう。そして、体制側としては盗聴行為を罵倒した被疑者を取り調べて警告を与えた体裁を整えた事実を構築したに違いない。

柔道指導を通じたアラブ社会との信頼関係がなければ、被疑者への報復は、もっと恐ろしいことになっていた筈だったと考える。

Second Celebration of Khafji Club

Khafji Club (Social & Cultural), in collaboration with Community & Catering Services Dep't. and the attendance of Mr. Hamad Al-Qadi, MGP, held the Second Celebration at the Arab Primary School grounds on last Friday, April 9, 1982.

Prizes were presented to Company employees' kids participating in the sport activities of the celebration.



Mr. M. Khalil ending long preparation efforts by distributing prizes among his young chaps.



A Judo demonstration by Mr. F. Okamoto, Judo & Karate Instructor, and a young trainee.

柔道活動を紹介する鉱業所新聞



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田古隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段(クウェート国柔道連盟七段)。

To be continued